

令和元年度子ども・子育て支援推進調査研究事業

<調査研究報告書タイトル>

『児童虐待対応におけるアセスメントの在り方に関する調査研究 調査報告書』

<実施主体名>

国立研究開発法人 産業技術総合研究所 人工知能研究センター

<調査研究報告書概要>

本邦における児童虐待通告件数は年々増加の一途を辿る。通告・相談される虐待事案の中には、重大な結果を伴うものも数多く含まれ、関係諸機関に慎重な対応を求める社会的要請も強い。このような背景から、「事例のリスク評価と認識の共有、児童相談所と市区町村の効果的な連携」の推進が提言されている。

本研究では、児童相談所と市区町村の連携場面を前提としたリスクアセスメントツールの構成を目的とした調査・解析を行った。具体的には、(1)アセスメント項目の候補となる項目を可能な限り網羅的に収集し、(2)全候補項目の基礎評価と項目プールを作成、(3)重大事態や事例の反復、一時保護判断に関わる各項目の妥当性の検証、(4)アセスメントツールへの組み上げと有識者評価に及ぶ4つの下位研究を実施した。

研究1では、国内外の文献を包括的に収集し、リスクアセスメントに関する重複のない項目を475項目抽出。調査過程で得られた先行研究の知見を整理した。

研究2では、抽出した調査項目を用いた全国Webアンケート調査を実施した。調査では、通告時・初期調査時においてそれぞれの項目がどの程度情報取得しやすいものか、あるいは項目への該当による事例の重篤性に関する項目評価情報を取得し、実際に各組織で進行管理中にある虐待相談事例に対して候補項目を用いたアセスメントの実施を依頼した。これにより、各項目が有する致死的行為・重篤状態の予測性能や、一時保護/児童相談所送致との関連性、ならびに反復通告との関連性を検討した。また、得られたデータの基礎解析を行い、各項目への該当による重篤項目並存のリスク比や、組織間での情報取得容易性や重篤度認識の差異を定量化した。その結果、児童の生命の危機に関わる事態の並存が懸念される項目や、組織間での情報収集能および認識の差異が明らかとなった。

研究3では、データに対する発展的な解析を実施した。具体的には、機械学習の技法を活用し、重篤事態や反復事例と予測的に関連する項目の抽出を行った。その結果、特定の条件下で重篤事態並存の予測に有用な項目が選抜されると同時に、機械学習等のデータ解析技術を用いた際の重篤事態の並存予測性能が示された。研究3までの手続きにより、包括的なアセスメント項目収集と、項目に対する多角的な評価が実施された。

研究4では、現場有識者を含め、抽出された選抜項目と項目情報を活用したリスクアセスメントツールの組み上げを行った。「実質的に現場での運用が可能か」「業務上の判断プロセスとの齟齬や拡充可能性」等の観点から項目が精査され、最終的なアセスメントツール(案)が構成された。そして、アセスメントツールにかかる限界点と、今後必要となる研究課題が整理された。

これらの研究から、最終的な成果物として(1)事業実施報告書、(2)研究報告サマリー、(3)リスク項目プール、(4)リスクアセスメントツール(案)の4つが作成された。

以上